

1. 略歴

- 1981年9月 Cornell 大学心理学部大学院博士課程入学 (フルブライト奨学生)
- 1985年6月 Cornell 大学心理学部大学院博士課程修了 (Ph.D.)
- 1985年9月 Virginia 大学心理学部専任講師
- 1987年4月 早稲田大学文学部専任講師
- 1990年4月 東京大学文学部助教授
- 2003年4月 東京大学文学部教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

認知心理学 (人間が行なっている情報処理の研究)

b 研究課題

- (1) 鏡像問題: この問題 (「鏡に映ると左右が反対に見えるのは何故か?」という問題) は、プラトンの昔から議論されてきたにもかかわらず、未だに定説がない。1998年に、この問題に解答する理論を記した論文をアメリカの学術雑誌に発表した。2000年から2004年にかけて、3つの実験をおこない、その理論の妥当性を立証した。これらの実験の結果は、2007年にイギリスの学術雑誌に発表した。また、日本の物理学者たちとも、シンポジウムで議論を交わし、誌上討論を行なった。現在、鏡像問題に関する単著を執筆中。
- (2) 外国語副作用: 不慣れな外国語を使用している最中は、一時的に思考能力が低下する。30年ほど前に、この現象を発見して、理論的な説明をおこない、実験によって立証した。現在は、国際基督教大学の森島泰則教授と協力して研究を続ける一方、国際学会のシンポジウムなどを通じて、この現象の周知に努めている。
- (3) 日本人論批判: 「日本人は集団主義的で、アメリカ人は個人主義的」という日本人論の通説について、実証的な国際比較研究を組織的に調べたところ、実証データはこの通説をまったく支持していないことを発見し、国内外の学術雑誌に論文を掲載した。この論文はかなりの論議を呼び、通説の擁護者と議論を続けてきた。2004年には、カナダの研究者による批判の妥当性を調べるために同調行動の実験をおこない、この批判が事実に合致していないことを確認した。これらの研究の成果をまとめて、2008年には、『「集団主義」という錯覚』と題する単著を出版した。
- (4) 因果的説明における価値のバイアス: 20年近く前、本学に赴任してきたばかりの頃に、湾岸戦争直前の世論を利用して、社会的事象の因果的説明は、社会的対象に抱いている価値によって歪められることを実験的に示した。この研究は、病気のために長らく中断していたが、2004年に新しい実験をおこなって、最初に行なった実験の結果に関する別解釈を排除できることを確認した。
- (5) 確率推定: 確率推定においては、事前確率を考慮に入れ損なう「基準率無視」という現象がよく知られている。この基準率無視の原因については、多くの研究者説明を試みてきたが、因果関係が推定されることが一因となっていることを一連の実験によって明らかにした。また、この現象が確率の形式での表記法に起因するとするドイツの研究者の著名な説が誤っていることも、実験的に証明した。

c 主要業績

(1) 著書

共著、子安増生・二宮克美 (編) 『キーワードコレクション 認知心理学』、新曜社 2011.
海保博之・松原望 (監修) 『感情と思考の科学事典』朝倉書店 2010.4.

(2) 論文

「書評シンポジウム: 高野陽太郎著『「集団主義」という錯覚』 — 日本人論の思い違いとその由来」
「著者による原著の紹介」『書評にこたえて』 『児童心理学の進歩 2010年版』 金子書房 282-284、306-313、2010.8.

Wakebe, T., Sato, T., Watamura, E., & Takano, Y. Information seeking in a non-hypothesis testing task. *Psychological Studies*, 55(4), 386-389, 2010.

綿村英一郎・分部利紘・高野陽太郎 一般市民の量刑判断. 『法と心理』9(1), 98-108, 2010.

杉本崇・高野陽太郎 対象に関する知識量が少ない場合のアンカリング効果: 意味的過程説と数的過程説の比較. 『認知心理学研究』8(2), 145-151, 2011.

常岡充子・高野陽太郎 他視点取得の活性化による言語的攻撃の抑制. 『社会心理学研究』 27(2), 93-100, 2012.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2010.4～2012.3

(2) 学会

「日本認知心理学会独創賞選考委員会」、役員・委員、委員長、2010～2011

「日本認知心理学会」、役員・委員、常務理事、理事、2010～2012

「日本心理学会」、役員・委員、代議員、2010～2012

日本認知科学会の第28回大会を2011年9月に東京大学で開催し、大会委員長を務めた。